

資料室だより 51

四句節を迎えるにあたり、後期ルネサンスの巨匠オルランドゥス・ラッスス Orlandus Lassus(1532-94)作曲「懺悔詩編」のすぐれたエディションを紹介したい。

Recent Reserches in the Music of the Renaissance, 86-87: Lasso: The seven Penitential Psalms and Laudate Dominum de caelis (Ed by P. Bergquist/A-R Edition)

悔悛し、神にたちかえることを促す詩編を、教会は悔罪詩編 Psalmi Penitentiales として7つの詩編を定め、それらはふさわしい時期に歌われあるいは唱えられる。その7つとは、6,32,38,51,102,130,143(ウルガタ訳では 6,31,37,50,101,129,142)であるが、これらをまとめて、あるいは抜粋して懺悔詩編として作曲するという、教会音楽の一ジャンルとしての懺悔詩編作曲の伝統は近代まで脈々と続いている。したがって悔悛というのはキリスト教音楽の重要なモチーフであると言える。

ラッススは懺悔詩編を 1559 年にバヴァリア公アルブレヒト 5 世の求めに応じて作曲している。彼はこれに少し先だって「シヴィラの預言」「ヨブ記に基づく9つのレクツィオ」をやはりアルブレヒト公のために作曲している。「シヴィラの預言」はルネサンスの音組織を逸脱したかのような遠隔転調により特異な響きをもつ。また、ヨブの神に対する激しい論争と絶望のテキストを持つこの 9 つのレクツィオをひとまとめにして単一の曲として作曲したのはラッススがはじめてであると言われている。いずれにしてもラッススの創作活動の中で異彩を放つ大曲であり、彼の充実期の産物と言えよう。彼はまた前後して「エレミア哀歌」を 3 組、そしてまたイタリア語による「ペテロの涙」を作曲していることからラッススの宗教作品における悔悛のテーマには興味深いものがある。

アルブレヒト公はラッススを非常に高く評価し、宮廷画家ハンス・ミーリヒに命じて楽譜のすべてのページに、聖書的な、またはその詩編に対応するようなふさわしい絵を描かせ、みごとな豪華写本に仕上げた。それらは Bayerische Staatsbibliothek が所蔵しており、悔悛ということを、詩と音楽と絵画とで同時に味わうことができる楽譜になっているのである。そしてさらにはアルブレヒト一族および、その宮廷画家ミーリヒ、そして宮廷音楽家のラッススと彼を取り巻く演奏家たちの肖像も描き込まれており、この時期における宮廷文化のモニュメントというべきものになっている。

ラッススは上記の悔罪詩編7つすべてに作曲している。そしてさらにはその後赦された者の感謝と賛美である詩編 148 と 150 を最後に付け加えて曲を完結させているのである。当時、悔罪詩編のあとに賛美の Laudate を付け加える習慣があったと指摘する説もあるが、ラッススがこれらを付け加えたのは、宗教的な意味と共に音楽的な意図もあっておことである。つまり7曲の詩編をそれぞれ教会旋法の順番に従って第一旋法から作曲し、7曲目は第7旋法となる。そして最後に賛美の詩編を第8旋法で作曲することによって教会旋法を

2003/2/28

ひとめぐりし、音楽的にも完全さを求めたのであろう。

ラッススは懺悔の部分にあたってはすべての詩編の最後に Gloria Patri et Filio et Spiritui Sancto（父と子と聖霊に栄光あれ）を5声で、Sicut erat in principio et nunc et semper et in saecula saeculorum Amen（初めにありしごとく、今もいつも代々に至るまで、アーメン）を6声でセッティングし、統一感を持たせている。

悔罪詩編作曲の優れた一例として資料室所蔵の研究用楽譜を紹介したが、上記に述べた「ヨブ記に基づくレクツィオ」「ペトロの涙」「シヴィラの預言」「エレミア哀歌」もすべて資料室に全集版で所蔵している。

（杉本ゆり 記）